

学校を休むことへの意識に関する研究

春日由美*・小林直央**・長谷和久*

A Study of Attitudes Toward School Absence

KASUGA Yumi*, KOBAYASHI Nao**, NAGAYA Kazuhisa*

(Received September 27, 2024)

本研究の目的は、学校を休むことについての意識を明らかにすることである。大学生 27 名（平均年齢 19.96±1.91 歳）を対象に回顧法を用いて小学生から高校生の時について、選択肢と自由記述からなる質問紙調査を行った。自由記述は KJ 法（川喜田, 2017）を援用し分類した。その結果、学校を休みたいと思ったことが「時々ある」「よくある」が合わせて 77%であった。学校を休みたいと思った時期は中高校生でそれぞれ 70%であった。休みたいと思った理由は「無気力・不安」「いじめを除く人間関係」が多かった。学校に行っていた理由は普段学校に行っていた時も、行きたくないと思っていた時も「友達に会うため」が多かった。自分が学校を休んだ時の気持ちは、肯定的な感情と否定的な感情など多様であったが、理由がなく休んだ場合や、3 日以上休んだ場合に、否定的な感情が多くなることが示された。休んでいる他者への意識は、自分との関係により異なることなどが示された。

I 問題と目的

令和 4 年度の小中学校の不登校児童生徒は 299,048 人となり、10 年連続で増加し、過去最多となった。そのうち、登校が年間 10 日未満の児童生徒数は 31,967 人にのぼる。加えて日本財団（2018）は、全中学生約 325 万人の 10.2%にあたる約 33 万人が不登校傾向にあるとの推計結果を報告しており、現在登校している児童生徒であっても将来的に不登校になる可能性を抱えている者も少なくないことが考えられる。また、不登校の小中学生のうち、欠席日数が 90 日以上の子どもの数は年々増加している（文部科学省, 2023）。工藤・市川（2022）は不登校について、予防から完全不登校までの 6 つのステージにおける登校しづりがなくなるまでの対応回数や期間を検討し、不登校の期間が長くなるほど対応に日数が必要なることを報告している。増田（2016）や諸富（2022）も初期対応の重要性を指摘しており、不登校の長期化を防ぐためには、早期対応の方策を検討することが重要だと考え

られる。

また不登校になる前の前駆的状态への支援の重要性も指摘されている。有賀ら（2010）は、不登校に至る前に、適切なアセスメント過程に基づいて支援の必要な児童生徒を発見することができれば、より早期に支援を行うことができ、不登校や学校不適応を予防することができるのではないかと述べている。同様に、向居・小川（2020）や林・水口（2022）も不登校に至る前の不登校傾向の児童生徒の理解や支援の必要性を指摘しており、不登校予防のためには、実際の欠席や遅刻等が見られる前の、不登校傾向の児童生徒への更なる理解や支援が重要であろう。

そしてこれまで不登校傾向についての研究も複数の側面から行われてきた。山口・石川（2006）は、高校生を対象に調査を行い、不登校傾向と友人、教師、部活や集団生活・親についてのストレスととの間に正の関連が見られることを報告している。杉本・庄司（2007）は中学生の不登校傾向と居場所の有無について検討し、居場所が

* 山口大学教育学部, 〒753-8513 山口市吉田 1677-1, kasuga@yamaguchi-u.ac.jp ** 山口大学教育学部卒業生

ない方が不登校傾向が高いことを報告している。また松本（2016）は、大学生を対象に回顧法を用いて中学時代と高校時代の不登校傾向について検討し、不登校傾向と学校魅力には負の強い相関が、不登校傾向と親の圧力とは正の相関があったことを報告している。

一方で、五十嵐（2010）は、不登校の前駆的状態である「不登校傾向」について、登校しつつも「学校に行きたくない」状態や、登校しているが学校生活を楽しむことができない状態とし、小幡・堀井（2020）は欠席・遅刻・早退などの登校回避行動や不登校の有無にかかわらず、生徒が「学校に行きたくない」と思う気持ちを登校回避感情としている。これらから、不登校傾向について検討する際には、実際の登校や欠席状態に関わらず、「学校に行きたくない」「学校を休みたい」と言った、休むことへの考え方について検討する必要があると考えられる。

そしてこのような休むことへの考え方についての研究はこれまで複数なされている。山下・清原（2004）は高校生を対象に調査を行い、学校に行くのが嫌になったことがある生徒が、友達と話したり遊んだりすることがとても楽しい、少しは楽しいと思うことがある割合が90%を超えていることを報告し、登校回避感情を持ちながらも不登校にならないのは友人との関係がよいからではないかと述べている。また中島・原（2009）は、中学生を対象に登校回避感情の促進要因と抑制要因を検討し、強い登校回避感情を比較的頻繁に感じる生徒は、対人的な不安や孤独感によって登校回避感情が高まることが多く、それでも「学校に行かなければならない」という社会通念により登校回避感情を抑えていることを報告している。また屋良・淡野（2019）は、小学生を対象に調査を行い、登校回避感情は「気分・疲労」（項目内容は「ねむたいとき」「つかれているとき」等）と「孤独感」（項目内容は「学校に居場所がないと感じるとき」「気の合う友だちがいないとき」等）が正の有意な関連を、「学校魅力」（項目内容は「友だちとあえるから」「学校が楽しいから」）と負の関連を示すことを報告している。そして本間（2000）は、中学生対象の調査において、「学校魅力」因子（項目は「学校が楽しいから」「友達とあえるから」等）が欠席願望の抑制に強い影響を与えることを報告している。

一方で、先の山下・清原（2004）は74.6%の高校生が登校回避感情（学校に行くのが嫌になったことがある）を経験したことがあると報告しており、現在登校している生徒たちも様々な要因から登校回避感情を持つに至ったり、その反対に登校回避感情を抑制する要因によって、休みたいと思いつつも登校を続けている場合も少なくない可能性がある。そのため、登校回避感情は、特定の児童生徒が感じる特別なものではなく、通常登校している児童生徒も日常的に感じている可能性があることも視野に

入れる必要があるだろう。

ところで、日本財団（2018）の調査では、1週間以上連続で学校を休んでいる、または休んだことがある生徒が1.8%いたことが報告されており、不登校になっていない児童生徒であっても数日間連続で休む場合があると考えられる。不登校の対応について、増田（2016）は連続欠席3日目、諸富（2022）は3、4日目の初期対応の重要性を指摘しており、1、2日休んだ時と、3日以上休んだ場合とでは、休んでいる本人の考え方も大きく異なってくる可能性が考えられ、次に登校する際の登校しやすさやしづらさに繋がることが考えられる。このため、不登校傾向の児童生徒を理解するために、1、2日休んだ際の意識と3日以上休んだ際の意識について明らかにすることは有益であろう。加えて、休んでいる際の意識は、欠席日数のみでなく、病気等での休みなのか、登校回避感情からの休みなのかといった休みの理由によっても本人の考え方が異なることが考えられる。

不登校の児童生徒への考え方に関して、自分自身ではなく、他者が不登校の際に、その他者についてどのような考えを持つかについての研究も行われている。本間（2000）は、先の中学生対象の調査において、不登校生徒への評価意識についても因子分析を行い、「配慮・共感」（項目は「心配」等）、「批判」（項目は「よくない」等）、「無関心」（項目は「関係ない」等）、「羨望」（項目は「うらやましい」等）の4因子構造を確認している。文部科学省（2021）の調査では、不登校経験のある児童生徒が休んでいる際に、周囲の、特に同級生などがどのように思っているかが不安であった児童生徒が半数以上いたことが報告されている（小学生では「あてはまる」が41.0%、「少しあてはまる」が23.4%、中学生では「あてはまる」が48.2%、「少しあてはまる」が23.4%）。このことから不登校状態にある場合、本人は周囲の目を気にしていることが考えられるが、本間（2000）のように、実際に他者が不登校の児童生徒に対してどのような考え方を持つのかについての研究はほとんどなされていない。また、その不登校状態の他者が、自分とどのような関係であるかによっても考え方は異なることが考えられる。

以上のことから、本研究では、松本（2016）を参考に大学生を対象に回顧法を用いて、小学校から高校までの学校を休むことについての考え方を明らかにする。その際、休みたいと思った経験や学校に行きたくない時にも行っていた理由、休んだ理由や休んだ日数が異なる場合それぞれの考え方、友人やそれ以外の他者が休んだ時の考え方など、複数の側面における学校を休むことの考え方について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 方法¹⁾

1. 対象者：大学生 27 名（平均年齢 19.96±1.91 歳、男性 8 名、女性 18 名、不明 1 名）。

2. 調査期間・調査方法：2023 年 12 月に質問紙を配布し、調査を行った。質問紙調査への協力は任意であり、協力しない場合も不利益を被らないこと、研究成果の公開において個人情報漏れることはないこと等を記載した。

3. 調査内容

(1)「自分が学校を休みたいと思った経験や時期」について

性別と年齢について尋ねた後、自分が学校を休みたいと思った経験や時期について、以降の 5 つの側面について回答を求めた

1)「学校を小学校から高校までの間に学校を休みたいと思ったことがあるか」について、「全くない」～「よくある」の 4 件法で尋ねた。

2)「学校を休みたいと思った時期」について、小学校低学年、小学校高学年、中学校、高校、の 4 項目から複数選択で回答を求めた。

3)「学校を休みたいと思った理由」について、文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の項目を参考に、以下の 14 項目を作成し、複数選択で回答を求めた。

項目内容：いやがらせ・いじめ、いじめを除く人間関係、先生との関係、勉強に関すること、進路に関すること、クラブ活動・部活動に関すること、学校の決まり等に関すること、入学・進学・転校に関すること、家族に関すること、親子関係、生活リズムの乱れ、無気力・不安、分からない、上記以外の理由

4)「学校を休んだ頻度」について、小学校低学年、小学校高学年、中学校、高校、の各期間について、「全くない」「10 日未満」「10 日以上」「覚えていない」の 4 項目から 1 つずつ選択するよう求めた。

5)「自分が学校に行っていた理由」について、①普段学校に行っていた時、②学校を休みたいと思って行っていた時、それぞれの理由について、以下の 8 項目を作成し、複数選択で回答を求めた。

項目内容：友達に会うため、先生に会うため、勉学に励むため、クラブや部活のため、将来の進路のため、親に行けと言われたから、理由はないが行かないといけないものだと思っていたから、上記以外の理由

(2)「自分が学校を休んだ時の気持ち」について

1) 自分が学校を休んだ時の気持ちについて、①やむを得ない理由があった時、②やむを得ない理由以外で休んだ時、それぞれについて自由記述で回答を求めた。

2) 自分が学校を休んだ次の日に登校する時の気持ちについて、①1、2 日休んだ時、②3 日以上連続で休んだ時、

それぞれについて自由記述で回答を求めた。

(3)「周囲の人が学校を休んだ時の自分の気持ち」について

1) 親しい友達が学校を休んだ時の自分の気持ちについて、①1、2 日休んだ時、②3 日以上連続で休んだ時、それぞれについて自由記述で回答を求めた。

2) クラスメイト（親しい友達以外）が学校を休んだ時の自分の気持ちについて、①1、2 日の休みの時、②3 日以上連続で休んだ時、それぞれについて自由記述で回答を求めた。

Ⅲ 結果

1. 学校を休みたいと思った経験や時期について

(1)「自分が学校を休みたいと思った経験」の有無は、「全くない」3 名（11%）、「ほとんどない」3 名（11%）、「時々ある」12 名（44%）、「よくある」9 名（33%）であり、「時々ある」が最も多かった。

(2)「自分が学校を休みたいと思った時期」を図 1 に示す。小学校低学年は 3 名（11%）、小学校高学年は 5 名（19%）であり、中学校と高校はいずれも 19 名（70%）であった。

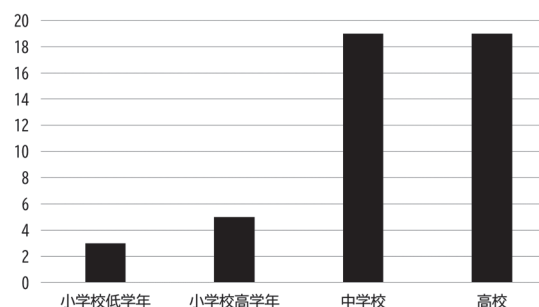


図 1. 学校を休みたいと思った時期（複数回答）

(3)「学校を休みたいと思った理由」を図 2 に示す。最も多かったのは「無気力・不安」の 13 名（48%）で、次いで「いじめを除く人間関係」が 11 名（41%）が多かった。

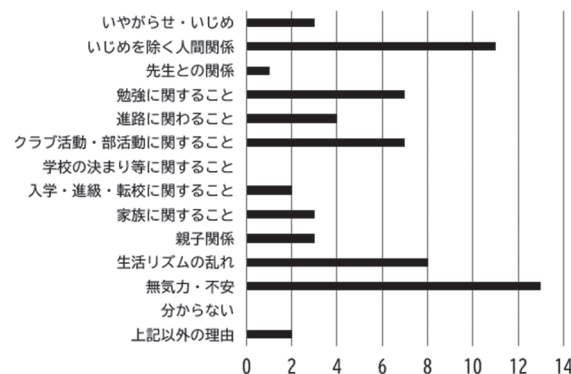


図 2. 学校を休みたいと思った理由（複数回答）

2. 学校を休んだ頻度

校種別の「学校を休んだ頻度」を図3に示す。いずれの校種でも「10日未満」が8名(30%)で最も多く、高校では「覚えていない」を選択した者は0名であった。「10日以上」は小学校低学年・高学年共に2名(1%)で、中学校は3名(11%)であったが、高校は8名(30%)であった。

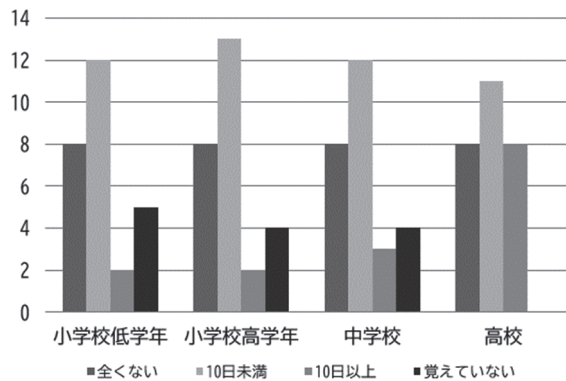


図3. 校種ごとの学校を休んだ頻度

3. 学校に行っていた理由

「普段学校に行っていた理由」と「学校を休みたいと思っていた時に学校に行っていた理由」を図4に示す。「普段学校に行っていた理由」では、「友達に会うため」が22名(81%)で最も多く、次いで「クラブ・部活のため」が15名(56%)、「勉学に励むため」「理由はないが行かないといけないものだと思っていたから」が各12名(44%)となった。「学校を休みたいと思っていた時に学校に行っていた理由」では、「友達と会うため」「理由はないが行かないといけないものだと思っていたから」が各11名(41%)で最も多く、次いで「親に行けと言われたから」が8名(30%)、「将来の進路のため」が6名(22%)となった。

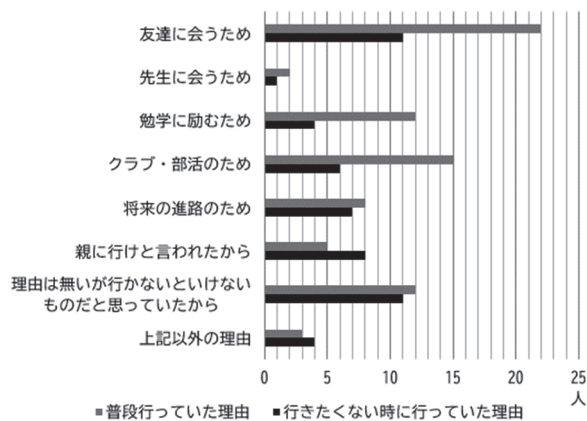


図4. 学校に行っていた理由（複数回答）

4. 自分が学校を休んだ時の気持ち

(1) 学校を休んだ時の気持ちについて、①やむを得ない理由で休んだ時、②やむを得ない理由以外で休んだ時、それぞれについて、KJ法(川喜田, 2017)を援用し、カテゴリー化を行った。まず第2著者が1つの意味のある文章のまとまりを単位として区切り、カードを作成した。その後、第1筆者と第3筆者でサブカテゴリー(以下〈 〉と表記)にグループ編成し、それらを更にカテゴリー(以下【 】と表記)に分類した後、第2筆者が確認を行った。

表1²⁾のように、やむを得ない理由で休んだ時の気持ちは、8つのサブカテゴリーと2つのカテゴリーに分類された。【肯定的感情】は〈嬉しさ〉〈仕方なさ〉〈回復志向〉〈友人志向〉の4つのサブカテゴリーからなった。【否定的感情】は〈勉強の不安〉〈他者への不安〉〈悔しさ〉〈罪悪感〉の4つのサブカテゴリーからなった。記述数は【肯定的感情】が14、【否定的感情】が9であった。

表2のように、やむを得ない理由以外で休んだ時の気持ちは、5つのサブカテゴリーと2つのカテゴリーに分類された。【否定的感情】は〈後ろめたさ〉〈諦め〉〈勉強の不安〉の3つのサブカテゴリーからなった。【肯定的感情】は〈安心感〉〈楽観〉の2つのサブカテゴリーからなった。記述数は【否定的感情】が12、【肯定的感情】が7であった。

表1. やむを得ない理由で学校を休んだ時の気持ち

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉(記述数) 記述内容例
【肯定的感情】(18)	〈嬉しさ〉(7) 嬉しい、少し得した気分、堂々と学校を休める
	〈仕方なさ〉(7) 仕方ない、しょうがない
	〈回復志向〉(2) 早く治らないかな
	〈友人志向〉(2) 友達に会いたくない
【否定的感情】(9)	〈勉強の不安〉(4) 勉強が遅れるのが不安、授業についていけるだろうか
	〈他者への不安〉(2) クラスの人から何と思われているだろうか
	〈悔しさ〉(2) 皆勤賞を取れないことが悔しい
	〈罪悪感〉(1) 罪悪感

表2. やむを得ない理由以外で学校を休んだ時の気持ち

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉(記述数) 記述内容例
【否定的感情】(13)	〈後ろめたさ〉(9) 罪悪感、自分がずるいことしているのかも
	〈諦め〉(3) このままだともう学校に遅刻するし休んだ方が楽そう、面倒くさい
	〈勉強の不安〉(1) 授業内容についていけなくなったらどうしよう
【肯定的感情】(7)	〈安心感〉(5) 安心感、解放されたという気持ち
	〈楽観〉(2) 有意義な時間にしよう、自由にすごせるので優越感

(2) 学校を休んだ次の日に登校する時の気持ちについて、①1、2日休んだ時、②3日以上連続で休んだ時、それぞれについて、KJ法(川喜田, 2017)を援用し、カテゴリー

一化を行った。

表3のように、1、2日休んだ次の日に登校する気持ちは、10つのサブカテゴリーと2つのカテゴリーに分類された。【自己の感情】は〈登校への意思〉〈勉強の不安〉〈落ち着きのなさ〉〈行きづらさ〉〈平常心〉〈漠然とした不安〉の6つのサブカテゴリーからなった。【他者への意識】は〈他者への期待〉〈他者への不安〉〈友人志向〉〈教員への気まずさ〉の4つのサブカテゴリーからなった。記述数は【自己の感情】が16、【他者への意識】が14であった。

表4のように、3日以上連続で休んだ次の日に登校する気持ちは、8つのサブカテゴリーと2つのカテゴリーに分類された。【自己の感情】は〈行きづらさ〉〈落ち着きのなさ〉〈勉強の不安〉〈漠然とした不安〉〈安堵〉〈平常心〉の6つのサブカテゴリーからなった。【他者への意識】は〈他者への懸念〉〈友人志向〉の2つのサブカテゴリーからなった。記述数は【自己の感情】が14、【他者への意識】が7であった。

表3. 1、2日学校を休んだ次の日に登校する時の気持ち

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉(記述数) 記述内容例
【自己の感情】(16)	〈登校の意思〉(5) 明日から頑張ろう、面倒くさいけど行か
	〈勉強の不安〉(4) 授業が心配、勉強ついていけない不安
	〈落ち着きのなさ〉(2) 緊張、そわそわ
	〈行きづらさ〉(2) もう行きたくない、面倒くさい
	〈平常心〉(2) 何も考えていない、平時と同じ
【他者への意識】(14)	〈漠然とした不安〉(1) 不安
	〈他者への期待〉(6) 誰か心配してくれるかな、話しかけてくれるかな
	〈他者への不安〉(4) どう思われているか不安、みんなと顔を合わせるのが緊張する
	〈友人志向〉(3) 友達に会うのが楽しみ
	〈教員への気まずさ〉(1) 先生に理由を聞かれるから気まずい

表4. 3日以上学校を休んだ次の日に登校する時の気持ち

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉(記述数) 記述内容例
【自己の感情】(14)	〈行きづらさ〉(7) 行きにくい、気まずい、ずっと休んでいたい
	〈落ち着きのなさ〉(5) そわそわ、大丈夫かな
	〈勉強の不安〉(5) 授業についていけない不安、授業が心配
	〈漠然とした不安〉(1) 不安
	〈安堵〉(1) やっと治った
【他者への意識】(7)	〈平常心〉(1) なんとも思わない(インフルエンザなど仕方なく休んだため)
	〈他者への懸念〉(6) 他人の目が怖いと言う気持ち、周りからどう思われるかな
	〈友人志向〉(1) 早く友達に会いたい

5. 周囲の人が学校を休んだ時の自分の気持ち

(1) 親しい友達が学校を休んだ時の自分の気持ちについて、①1、2日休んだ時、②3日以上連続で休んだ時、それぞれについて、KJ法(川喜田, 2017)を援用し、カテゴリー化を行った。

表5のように、親しい友達が1、2日学校を休んだ時の気持ちは、6つのサブカテゴリーと2つのカテゴリーに分類された。【相手への意識】は〈気がかり〉〈関与〉〈推測〉の3つのサブカテゴリーからなった。【自己の感情】は〈再会の希望〉〈さみしさ〉〈羨ましさ〉の3つのサブカテゴリーからなった。記述数は【相手への意識】が24、【自己の感情】が9であった。

表6³⁾のように、親しい友達が3日以上連続で学校を休んだ時の気持ちは、8つのサブカテゴリーと2つのカテゴリーに分類された。【相手への意識】は〈気がかり〉〈推測〉〈関与〉〈楽観〉の4つのサブカテゴリーからなった。【自己の感情】は〈さみしさ〉〈再会の希望〉〈自己の心配〉〈欠席志向〉の4つのサブカテゴリーからなった。記述数は【相手への意識】が25、【自己の感情】が7であった。

表5. 親しい友達が1、2日学校を休んだ時の自分の気持ち

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉(記述数) 記述内容例
【相手への意識】(24)	〈気がかり〉(19) 大丈夫かな、心配、何かあったんだろう
	〈関与〉(3) 連絡してみよう、休んでいる間のノートを見せる
	〈推測〉(2) 何か事情があるんだろう、疲れているのだろうなと思う
【自己の感情】(9)	〈再会の希望〉(5) 早く来てほしい、早く会いたい
	〈さみしさ〉(3) さみしい
	〈羨ましさ〉(1) 休めていいな

表6. 親しい友達が3日以上連続で学校を休んだ時の自分の気持ち

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉(記述数) 記述内容例
【相手への意識】(25)	〈気がかり〉(20) 大丈夫かな、心配、何かあったのかな
	〈推測〉(2) 学校に来づらいのかな、嫌なことでもあったのかな
	〈関与〉(2) LINE してみよう、ノートやプリントを取っておい
	てあげよう
【自己の感情】(7)	〈楽観〉(2) まあ来るでしょう、何かあったかな旅行?
	〈さみしさ〉(3) さみしい
	〈再会の希望〉(2) 話したい
	〈自己の心配〉(1) 誰と一緒に過ごそう
	〈欠席志向〉(1) 私も休みたいし仲いい子いい子休もうかな

(2) クラスメイト(親しい友達以外)が学校を休んだ時の自分の気持ちについて、①1、2日休んだ時、②3日以上連続で休んだ時、それぞれについて、KJ法(川喜田, 2017)を援用し、カテゴリー化を行った。

表7のように、クラスメイト(親しい友達以外)が1、2日学校を休んだ時の気持ちは、5つのサブカテゴリーと2つのカテゴリーに分類された。【相手への意識】は〈気がかり〉〈休みの認知〉〈推測〉の3つのサブカテゴリーからなった。【他人事】は〈無関心〉〈自分本位〉の2つのサブカテゴリーからなった。記述数は【相手への意識】が

14、【他人事】が14であった。

表8のように、クラスメイト（親しい友達以外）が3日以上連続で学校を休んだ時の気持ちは、5つのサブカテゴリーと2つのカテゴリーに分類された。【相手への意識】は〈気がかり〉〈興味本位〉〈推測〉の3つのサブカテゴリーからなった。【他人事】は〈無関心〉〈自分本位〉の2つのサブカテゴリーからなった。記述数は【相手への意識】が14、【他人事】が9であった。

表7. 親しい友達以外が1, 2日学校を休んだ時の自分の気持ち

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉(記述数) 記述内容例
【相手への意識】(14)	〈気がかり〉(7) 大丈夫かな、心配、どうしたのかな
	〈休みの認知〉(5) 認識、休みなんだ
	〈推測〉(1) ズル休みかな
【他人事】(14)	〈無関心〉(13) 何とも思わない、特に影響はなし、気にしない
	〈自分本位〉(1) 給食があるからラッキー

表8. 親しい友達以外が3日以上連続で学校を休んだ時の自分の気持ち

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉(記述数) 記述内容例
【相手への意識】(14)	〈気がかり〉(10) 大丈夫かな、心配、何かあったのかな
	〈興味本位〉(2) 心配(興味本位)、野次馬根性から理由だけ気になる
	〈推測〉(2) 体調でも悪いのかな
【他人事】(9)	〈無関心〉(8) 何とも思わない、休んでいることすら知らない
	〈自分本位〉(1) 給食は止めないで

IV 考察

1. 学校を休みたいと思った経験や時期

調査の結果、全体の89%が学校を休みたいと思った経験があり、山下・清原(2004)において高校生の74.6%が学校に行くのが嫌になったことがあるとの結果と同様の結果になった。これらから、学校を休みたいと思うことは特別なことではないと考えられる。

学校を休みたいと思った時期は、校種により異なっており、小学校では11%~19%であったが、中学校と高校では70%となっており、学校を休みたいと思うことはどの校種でも同様に経験されるのではなく、中学生や高校生において多く見られる可能性が考えられる。

そして学校を休みたいと思った理由では、「無気力・不安」が最も多く(48%)、2番目に多かったのは「いじめを除く人間関係」(40%)であった。これらから、学校を休みたいと思う場合、無気力や不安など漠然とし、本人がはっきりと意識できない要因の影響も少なくないと考えられる。また、先述のように、先行研究において登校回避傾向の促進や抑制に対して人間関係が関連することが複数報告されていることも踏まえると(山下・清原, 2004; 中島・原, 2009; 屋良・淡野, 2019)、人間関係は学校に

行きたいと思えるかどうかに関わりやすい可能性が考えられる。

2. 学校を休んだ頻度

校種ごとの学校を休んだ頻度について、小学校と中学校では10日以上休みの率は16%以下であったが、高校では30%となった。このことから、高校では休み頻度が急激に増える可能性が考えられる。文部科学省(2023)では、令和4年度の中学校での不登校生徒数の割合は6.0%に対し、高等学校は2.0%であることが報告されている。不登校の定義にあたる年間30日以上欠席以上にはなっていないが、中学生以上に高校生は休みたい気持ちを抱えながら登校している生徒が増える可能性も考えられる。そのため、高校生の不登校傾向には留意する必要があると考えられる。

3. 学校に行っていた理由

学校に行っていた理由では、普段行っていた時も行きたくない時に行っていた時も、いずれも「友だちに会うため」が最も多くなった。次いで普段行っていた時では、「クラブ・部活のため」が続いた。また、行きたくない時では、「友だちと会うため」と「理由はないが行かないといけないと思っていたから」を選択した者が同数であった。山下・清原(2004)は登校回避感情を持ちながらも不登校にならないのは友人との関係が良いからではないかと述べ、中島・原(2009)は「学校に行かなければならない」という社会通念により登校回避感情が抑えられていることを報告している。これらから、休みたいと思っているかどうかに関わらず、学校に行く理由として友人の存在や、学校は行くものだといった社会規範の影響は大きい可能性が考えられる。

4. 自分が学校を休んだ時の気持ち

(1) やむを得ない理由の時とそれ以外の理由の時

自分が学校を休んだ時の気持ちは、やむを得ない理由で休んだ時も、やむを得ない理由以外で休んだ時も、【肯定的感情】【否定的感情】という2つの感情があることが示された。

自分がやむを得ない理由で学校を休んだ時の気持ちでは、否定的感情の2倍の肯定的感情の記述が見られ、休むことへの肯定的な感情(〈嬉しさ〉〈仕方なさ〉)や、登校への前向きな記述(〈回復志向〉〈友人志向〉)が見られた。このことから、やむを得ない理由で休んだ時は、心理的負担を感じない場合も少なくないことが考えられる。一方で、〈勉強の不安〉〈悔しさ〉も見られ、行きたいのに行けないという感情があると考えられる。また、やむを得ない理由での欠席であっても、〈他者への不安〉〈罪悪感〉という否定的感情が生じる場合があることが示された。

自分がやむを得ない理由以外で学校を休んだ時の気持ちでは、否定的感情の記述が肯定的感情の倍近く見られ、

明確な理由がない場合の欠席は、不快な感情を抱いている場合が少なくないことが考えられる。一方で、〈安心感〉〈楽観〉といった肯定的感情を持つ者もいることが示された。

これらから、休んだ理由に関わらず、肯定的感情を持つ者もいれば、否定的感情を持つ者もいると考えられ、欠席している児童生徒の感情は多様であると考えられる。ただし、やむを得ない理由でない欠席の場合は、本人は否定的感情を持つ場合が少なくないと考えられる。

(2) 1, 2 日休んだ時と 3 日以上休んだ時

休んだ日数の違いでは、1, 2 日休んだ時も、3 日以上休んだ時も、【自己の感情】【他者への意識】という 2 つの側面があることが示された。

1, 2 日休んだ次の日に登校する場合は、自分自身の感情や他者への意識として、〈登校の意思〉〈他者への期待〉といった前向きな気持ちがあり、同時に 1, 2 日の休みでも、〈勉強の不安〉〈落ち着きのなさ〉〈他者への懸念〉など、自己や他者への否定的な感情も生じることが示された。また、3 日以上休んだ次の日に登校する場合は、肯定的な感情は少なくなり、自己においても他者に対しても〈行きづらさ〉〈他者への懸念〉など否定的な感情が多くなることが示された。

これらから、休んでいる時は日数に関わらず、自分自身と他者について考えているが、3 日以上欠席した場合、より自分自身に意識が向きやすくなり、加えてネガティブな感情が増加する可能性が考えられる。

5. 親しい友達とそれ以外の者が学校を休んだ時の気持ち

親しい友達が 1, 2 日学校を休んだ時の気持ちは、〈気がかり〉など相手を気遣う記述が多く、自分自身の感情では、〈再会の希望〉など相手を希求することが多いと考えられた。また、親しい友達が 3 日以上休んだ時は、〈気がかり〉など相手を気遣う記述や、〈さみしさ〉など相手を希求する記述の他、〈楽観〉のように、相手の欠席を楽観的に捉えようとする可能性も考えられた。その他、〈自分の心配〉〈欠席志向〉など、友人の長期の欠席が自分自身の学校生活の不安や休みたい気持ちに繋がる可能性も示された。

親しい友達以外のクラスメイトが 1, 2 日学校を休んだ時の気持ちは、相手への気遣いの記述も見られたが、単に休みだと認識したのみや無関心、否定的な推測や自分本位な記述も見られた。また、親しい友達以外のクラスメイトが 3 日以上休んだ時は、相手への気遣いの記述も見られたが、興味本位の気がかりや無関心、自分本位な記述が見られた。

これらのことから、他者の欠席について、他者が自分にとって重要かどうかによって異なると考えられる。親しい友達の場合は気にかけ、助けようという姿勢がうかが

えたが、親しい友達でなければ、気にかける児童生徒もいれば、特に関心を示さない場合も少なくないと考えられた。

V まとめと課題

本研究では、学校を休むことについての考え方を明らかにすることを目的とした。

その結果、学校を休みたいと思うことは珍しくないこと、中学生や高校生で休みたいと思う者が多くなることが考えられた。不登校予防のためにも、保護者や教員、スクールカウンセラー等の子どもを支える大人は、中高生は現在登校しているとしても休みたいと思うことも珍しくないことや、休みたいと思いながらも登校している場合も少なくないことを理解しておく必要があるだろう。

また、今回の結果から、学校に行きたい、あるいは休みたいと思うことに人間関係が大きく影響すると考えられた。そのため、不登校の予防のためには、新しいクラスが始まる 4 月当初から、クラスの人間関係を良好にする具体的な対策を実施することが重要と考えられる。

そして今回、自分が休んだ時は、休む理由に関わらず、肯定的感情と否定的感情のいずれも生じる可能性があることが示され、休んでいる時の考え方は多様であることがうかがえた。そのため、教員やスクールカウンセラー等は、「欠席している児童生徒はこう思っているだろう」と決めつけるのではなく、それぞれの児童生徒が異なる感情を抱いている可能性を考慮し、個々の児童生徒に応じた対応をすることが必要と考えられる。一方で、3 日以上休むと登校に関して否定的感情が強くなると考えられ、長期欠席を防ぐためには、増田 (2016) や諸富 (2022) が指摘するように、3, 4 日目の早期対応が不可欠であろう。

そして、休んでいる他者への意識は、自分との関係により違いが見られた。文部科学省 (2021) の不登校経験のある児童生徒への調査では、「学校の同級生などがどう思っているか不安だった」と言う項目に対し、小学生では 41.0%が、中学生では 48.2%が「あてはまる」と回答しており、不登校児童生徒本人にとって周囲の同級生が自分をどのように見ているかを不安に感じるものが少なくないと考えられる。一方で今回の結果から、休んでいる児童生徒の周囲の者は、親しい友人の場合は心配やサポートしようとするなど肯定的であり、親しくない場合は心配する場合や、気にしていない場合が少なくないことが明らかになった。いずれにしても休んでいる児童生徒に対して積極的に批判する者はほとんどないと考えられた。

本研究の課題として、人数の少なさがある。また、菊島 (1997) が述べるように、本研究の対象者は大学生であり、レトロスペクティブなアプローチでは記憶の変容や忘却

の問題があることは否めない。そのため今回の結果は限定的なものであり、今後は対象人数を大幅に増やして検討したり、対象を中学生や高校生に広げて検討することが必要である。

付記

本研究は第2筆者の卒業研究として調査したデータを基に再分析と再検討を行ったものである。調査協力をいただいた皆様へ心より感謝申し上げます。

注

- 1) 表3～表8の分析も同様の方法で行った。
- 2) 表1～表8において、記述内容例は内容が変わらない程度の省略や平仮名を漢字に修正した箇所がある。
- 3) 表6と表8の分析において、問いへの答えでないと考えられた回答(各1つ)を分析から除いた。

引用文献

- 有賀美恵子・鈴木英子・多賀谷昭(2010). 不登校傾向に関する研究の動向と課題, 長野県看護大学紀要, 12, 43-60.
- 林茜・水口崇(2022). 中学生における不登校傾向と学校適応感・教師への信頼感との関連, 信州心理臨床紀要, 21, 62-86.
- 本間友巳(2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析, 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 五十嵐哲也(2010). 小学生用不登校傾向尺度の作成と信頼性・妥当性に関する検討, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 13, 211-216.
- 川喜田二郎(2017). 発想法 改版 中央公論新社
- 菊島勝也(1997). 不登校傾向におけるストレスとソーシャル・サポートの研究, 10(2), 11-20.
- 小幡緑・堀井俊章(2020). 中学生の登校回避感情に対する学級担任の推察と支援, 横浜国立大学教育学部紀要 I 教育科学, 3, 178-193.
- 工藤弘・市川哲(2022). 登校しぶりで欠席。学校はいつ対応を開始したらよいのか?—ステージ別にみる不登校激減法の予防と対応開始時期による効果—, 日本教育心理学会第64回総会発表論文集, 346.
- 増田健太郎(2016). 不登校の現状と取組み 増田健太郎(編) 不登校の子どもに何が必要か 慶応義塾大学出版 pp.1-15.
- 松本直子(2016). 中学・高校生の登校回避感情と登校・不登校理由から考察する不登校傾向とその支援—大学生を対象とする回顧法質問紙調査から—, 就実大学大学院教育学研究科紀要, 2, 115.
- 文部科学省(2021). 不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書 (https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt_jidou02-000018318_03.pdf (2024年9月4日取得))
- 文部科学省(2023). 令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について (https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2024年9月4日取得))
- 諸富祥彦(2022). 学校に行けない「からだ」 図書文化向居暁・小川莉奈(2020). 中学生における過剰適応とレジリエンスが不登校傾向に及ぼす影響(1), 日本教育心理学会総会発表論文集, 62, 360.
- 中島義実・原明子(2009). 登校回避感情の類型と、促進要因・抑制要因との関係—登校回避感情の頻度と強度、双方からの測定による類型化の試み—, 研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—, 2(2), 1-8.
- 日本財団(2018) 不登校傾向にある子どもの実態調査 (https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/01/new_inf_201811212_01.pdf (2024年9月4日取得))
- 杉本希映・庄司一子(2007). 中学生における「居場所」の有無と不登校傾向との関連の検討, 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 286.
- 山口豊子・石川利江(2006). 高校生のストレス尺度作成と不登校傾向との関連性の検討, 9, 7-14.
- 山下みどり・清原浩(2004). 高校生にみる不登校傾向に関する研究—意識調査を通して—, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 14, 21-38.
- 屋良皇稀・淡野将太(2019). 児童の登校を巡る意識に関する研究, 琉球大学教育学部紀要, 95, 57-63.